# 今井俊満君・追悼

祖父江昭彦（23期）
武蔵今井俊満後援会

去る4月15日の夕、池袋の東武百貨店14階、バンケットホールで一つの追悼会が行われた。会衆30人たらずの、ささやかな集りではあったが、極めて感動的な、故人への哀惜に満ち充ちて催された。

故人とは、旧制20期卒業生の今井俊満。会衆は、彼の同期生を中心とした友人達と遺族二人であった。

今井の生前のポートレートや、数ある作品の複写などが掲示されている会場では、代表幹事の挨拶、黙禱と続き、この後で数々の憶い出のスピーチが寄せられ、しめやかながら和やかな歓談が続いた。そして壁に一枚の、B3大に拡大された写真が貼られ目を惹いていた。

それは昭和20年4月、尋常科から高校生へ、新たに進学した同期約80人の生徒たちの、講堂前での整列写真であった。あの三色の佩章を懸けた少年たちの中に、今井の姿があったのは勿論である。

今井は死の直前まで、その写真を築地・国立がんセンターの病室の、己れのベッドの真上の天井に張り、眺め続けていたという。

会はこの後、出席者全員の「武蔵讃歌」斉唱で終ったが、「武蔵」の一体感が強く感じられたのであった。

さて、今井俊満は、3月3日の夕、折からの桃の節句の賑わいをよそに、10年間にわたる癌（白血病に始まり膀胱癌に至る7つの癌）との闘いに終止符を打ち、卒然として逝ってしまった。享年73歳。

思えば、20世紀後半の、世界美術界に聳立する数ある才能の中でも、特に際立った存在であった画家、今井俊満「IMAI」。彼は美術界のみならず、ファッション、パフォーマンスの世界でも、数々の話題を生み続けて、常に時代の先端に立ち、しかも、その立った場に一瞬たりとも止まらず、ひたすら芸術創造の行程を歩み続けた男である。そして、今井が、どのようにして今井たり得たのか。「武蔵」との関わりの履歴の中に、その一端を見てみたい。なぜならば、今井こそ、真正の武蔵の子であったのだから。

今井俊満は一九二八年、大阪船場の富商・今井俊雄氏の次男として生誕。一九四一年、父君の知友であり、当校の創立者でもある根津嘉一郎氏のすすめで同校の尋常科に入学した。苛烈な太平洋戦争の時代を過し、一九四五年四月、同校高等科の文科乙類に進み、同年八月終戦を迎えた。爾後、学生としては困難を極めた戦後の社会状況に当面し、学業の進展と平行して青年特有の懊悩と焦燥の日々を過したことは自明であろう。

更に彼は、己れに課した厖大な内外書物の読解と、それに伴う哲学的・文学的思索を通じ、後世、最も思弁的な画家といわれた素地を養っていたのである。

一九五〇年、既に幼時からの強い画家志向、また心中に燃え立つ限りない美への懐いに駈られた彼は、周囲の与望を裏切る形で、東大法学部入学を自ら断ち、果然として画家へのスタートを計った。東京芸大油絵科への一年間の通学、そして同年秋の新制作派展出品で本格的な画壇登場を試みたのである。

一九五二年春、遂に今井は日本脱出、パリに渡った。この決断と行動こそが世界的抽象画家、「アンフォルメル」の旗手IMAIの誕生に外ならなかった。アンフォルメル（正式にはシニフィアン・ド・ランフォルメル）は、当時、批評家ミッシェル・タピエが推進していた最尖端の抽象美術運動である。通称「非造形美術」と呼ばれるが、その運動に参加した今井は瞬く間にパリ画壇の階梯を駈け上り、新進気鋭の作家として盛名を馳せた。

57年夏、初めて帰国。既にその滞仏中の活躍を以て日本でも声価を高めた彼の画業は、いわゆる衝撃的なアンフォルメル旋風を捲き起すことになる。

以来、因習、怠惰、停滞、卑俗に挑戦し続け、烈しい情熱をたたきつけるような今井の絵は、文字通り日本中を席捲し、次のアクション「花鳥風月」の登場を待つことになる。

アンフォルメル旋風の後、今井に若干の静謐が訪れた。それは大阪万博での複数の美術監督、美術プロデューサー就任など、画業以外の活躍もあり、一つには次の飛躍への充電が、即ち新発想の涵養が不可欠であったのであろう。





そして、そのエネルギーは'86年、今井を再び国際美術の雄として世界中に認識せしめた「花鳥風月」連作の創造に注ぎこまれた。

「花鳥風月」連作は、しばしば琳派的作品として通称されるが、それは単なる同派の模倣でも再生でもなく、あくまでも彼の思想、即ち永遠の疾走者として、西欧の先端から東洋の理念を駈け抜けて、また永遠の位相へ回帰してゆく彼独自の芸術創造のコンセプトBEYOND EAST AND WESTの顕現に他ならなかった。

金色の輝きのなかで色彩の饗宴がほしいままに繰り拡げられた「花鳥風月」の世界、それは、また何時の日か、真の日本の—日本的ではない—今井亡き後の芸術家によって継承され、反復されるであろう。

最後に、今井俊満こそ、武蔵建学の理想をその全身全能を以て具現した人間であることを敢えて記したい。なぜならば、吾校の三理想　1、東西文化融合、2、世界に雄飛する、3、自ら調べ自ら考える——それは畢竟するに、彼、今井そのものではないだろうか。

まさに、今井俊満は武蔵の真正の子であった。

与えられた紙数が尽きる。

われら旧制武蔵高校の友人は、今、誇りを以て亡き今井を讃え、改めて万感の憶いを、偉大な亡友に捧げて、ここに永遠の別れを告げる。

今井よ、ゆっくり、眠れ。